

## 『一乗要決』と『守護国家論』の関連

関 戸 堯 海

日蓮は、『法華経』を顕彰した仏教者として天台大師智顗を高く評価し、『法華玄義』『法華文句』『摩訶止観』の天台三大部を頻繁に引用するなど、天台大師の教学を継承している点が確認できる。しかし一方で日蓮は末法という時代性と受難の体験を通して、天台教学を超越して独自の法華仏教を樹立していったのである。

天台大師に比較して、日本天台教学を代表する伝教大師最澄は「三国四師」の思想系譜上に位置づけられるにもかかわらず、日蓮に与えた思想的な影響について明確にされているとは言いがたい。日蓮が末法年代を算出するにあたって『末法灯明記』（現在では偽撰と考えられている）を引用したことや、経判論・本門思想などを論じる時に『守護国界章』『法華秀句』などに言及されることが知られている程度である（浅井田道『上古日本天台本門思想史』参照）。また、恵心僧都源信についても、『往生要集』が浄土教興隆に果たした役割が強調されるあまりに、長く日蓮と源信との思想的関連については

否定されてきた。しかし最近では『涅槃経』などの引用經典を接点として『一乗要決』と日蓮遺文との関連について指摘されている（渡辺宝陽『日蓮宗信行論の研究』参照）。

このような点から日本天台教学ことには最澄の著作と日蓮遺文の思想的関連について明確にすることを目指し、その検証の過程として源信と日蓮の思想的関連について考察したい。そのため本稿では特に『一乗要決』『大文第八 教の権実を弁ず』と『守護国家論』『大文第一 如来の経教に於て権実二教を定むることを明す』の関連について論じることとする。

『一乗要決』は寛弘三年（一〇〇六）に源信が『法華経』の一乗思想を強調し、最澄と徳一の三一権実論争に終止符を打ったとされる書で、八門から成る。また日蓮の『守護国家論』は正元元年（一二五九）鎌倉での著作で、法然『選択集』の批判を目的としつつ『法華経』の真实性を明確にすることを中心としており、七科一六門からなる長編の遺文である。

また『立正安国論』撰述の前提となったことでも知られる日蓮の初期の重要教義書である。

両書は『法華経』の一乗思想を宣揚することを基本とする点において共通する基軸にあることは言うまでもないが、特に『一乗要決』の「大文第八 教の権実を弁ず」で源信が『法華経』と『華嚴経』『解深密経』などの経典を比較して、『法華経』の一乗思想の優位について論じる部分と、『守護国家論』の「大文第一 如來の経教に於て権実二教を定むることを明す」で『無量義経』の「四十余年 未顕真実」を端緒として、『法華経』こそが釈尊の真実の教えであることを論証している部分とに、引用される経文・論証の方法などにおいて共通性を認めることができる。

『一乗要決』『大文第八』が三門に分かれる中の「一、法華の実教を明す」では、『無量義経』説法品の「四十余年 未顕真実」、『法華経』方便品の「世尊法久後 要当説真実」などを引用して、天台宗において法華一仏乗を真実として、その他の三乗思想・五姓各別を説く諸経を方便とする点を確認する。ここで源信は「若し五乗真実ならば前の深密等の經に三乘五性を説く、何ぞ四十余年 未顕真実と言ふや。若し一乗方便ならば今法華經に唯一乗と説は何ぞ、諸仏法久後 要当説真実 広説諸經 此經第一と言ふや」(『正藏』七四卷三八b~c)と述べ、『無量義経』の説示によって、『法華経』

の一乗思想が爾前の諸經に勝れる特徴であることを明説する。

続いて、慧沼の疑義として三点をあげる。第一は慧沼が「無上慧経は法華の後にあらず」と述べて、『法華経』の聴衆に阿闍世王がいるが『無上慧経』には列衆の上首に頻婆娑羅王がいることによって、頻婆娑羅王は阿闍世に殺害されたという事実からする矛盾点を指摘していること。第二は『仁王経』に「波斯匿王の云く、二十九年我等の為に摩訶般若等を説と為す」と記されるのに対して『勝鬘経』には「波斯匿王及び末利夫人は法を信すること久しからず」とあることから「勝鬘経は亦た三十年の後に非ず」とする点。第三には『楞伽経』に『大集経』『宝幢陀羅尼経』『楞伽経』『海龍王経』『鶡峴摩羅經』『如來藏経』の説時について様々に説かれている点からすると、『無量義経』の「四十余年 未顕真実」についてには信じがたいとの疑問である。これらの慧沼の疑念について、源信は「答。今謂く。余教の前後は要す諍ふ所に非ず。法華の真実は是れ正しく立つる所なり。然るに四十余年 未顕真実とは既に金口の文なり。疑念すべからず」と述べて、枝末の経典については説時の前後は問題にすべきではなく、『無量義経』は釈尊の金口の文であるから疑念を持つべきではないと反論し、さらに宝塔品の「多宝如來の証明」、神力品の「他方分身諸仏の証明」などを引用して

爾前經が方便であり『法華經』が真実であることは明瞭であると強調するのである。

さらに源信は「問。密嚴經上卷に云く、十地華嚴等の大樹と神通・勝鬘及び余經とは皆此の經より出づ。是の如く密嚴經、一切經の中に勝りと、また大雲經の第四に云く、是の經は即ち是れ諸經の轉輪聖王なり。何を以ての故に。是の經典中に衆生の実性、仏性常住法藏を宣説するが故に、已上。此れ法華と何の差別ありや」（『正藏』七四卷三六九a）と設問して、『密嚴經』『大雲經』にそれぞれ「己れの經が第一である」と記されるのと『法華經』が第一であるとする『無量義經』とは、どのような違いがあるかについて論じている。ここで源信は「謂く彼は華嚴勝鬘等に望めて王と為す。法華の已今当に望が如きにはあらず。又彼は唯だ真相に約して王と為す。法華は兼て二乗作仏を説く」（同前）と述べ、『密嚴經』『大雲經』は『華嚴經』『勝鬘經』などに対しての限定的な劣を説くのであって、『法華經』がすべての經典に勝れることは法師品の「已今当」と方便品の二乗作仏の教えによってわかることを指摘するのである。さらには『大智度論』四十六に「諸經の中に般若波羅蜜は最大なり」とあることから『般若經』が第一ではないかという疑問点については「答。此は第六の般若波羅蜜を指し以て最大と為す。般若部の經と謂に非ず。法華の中に五波羅蜜を望て功德を校量せるに般若

波羅蜜を除くが如し。論の意是の如し。又設ひ彼經を指すと雖も、失無し、彼の多く真相の智慧を説くを以て所説一切最大なりと謂ふに非ず」（同b段）と述べ、『般若經』に空の真相の論理の一端を説くことによって「最大」と称するのであって、「一切」の經典に勝ることを言うのではないと結論づけている。

これに対し『守護国家論』「大文第二」が四門に分かれる中の第一「一、大部の經の次第を出して流類を撰することを明す」で日蓮は、『無量義經』「初めに四諦を説き、次に方便十二部經・摩訶般若・華嚴海空を説く」および『華嚴經』離世間淨眼品『法華經』序品・方便品などを引用して、釈尊の説法が『華嚴經』阿含經・方等經・般若經・無量義經・法華經・普賢經・涅槃經」という次第順序で説かれたことを確認している。ここで『般若經』と『無量義經』の説時について「仁王經に云く、二十九年中と。無量義經に云く、四十余年と」（定九二頁）とあるが、前述のように同様な『仁王經』の引用が『一乗要決』にもみられる上に、『守護国家論』の論点が『無量義經』の經文を中軸とする点、および『一乗要決』大文第八で源信が慧沼の説を斥けて、四十余年の説法の後には釈尊の真実である法華一仏乗が明らかにされたと主張することと同基軸にあると見ることができる。

また『守護国家論』では「大部の經、大概是の如し。此よ

り已外諸の大小乗經は次第不定なり。或は阿含經已後に華嚴經を説き、法華經より已後に方等・般若を説く。皆義類を以て之を収めて一処に置くべし」(定九三頁)と、五時に分類される代表的な經典を中心にして勝劣を考えるべきであり、その他の枝末にあたる經典については問題とすべきではないと述べるが、これも『一乗要決』の説示と共通する面がある。

次に『守護国家論』の四門の第二「二、諸經の浅深を明す」では、前節と同様に『無量義經』「初めに四諦を説き、次に方等十二部經・摩訶般若・華嚴海空を説き、菩薩の歴劫修行を宣説す」「四十余年 未顕真実」と引用して、『法華經』が二乗作仏・久遠実成を説く点において『無量義經』『涅槃經』にも勝れることを述べているが、ここでも『無量義經』を中心にして法華最勝を論証する点において『一乗要決』と共通している。さらに『守護国家論』では「問うて曰く、密嚴經に云く、一切の經中に勝れたりと、大雲經に云く、諸經の轉輪聖王なりと。金光明經に云く、諸經中の王なりと。此等の文を見るに諸大乘經の常の習いなり。何ぞ一文を瞻て無量義經は四十余年の諸經に勝ると云うや」(定九三頁)と『密嚴經』『大雲經』などを引用して『無量義經』の説示についての疑義を示した上で「爾前の諸經の第一とは縁に隨いて不定なり。或は小乗の諸經に對して第一と。或は報身の壽を説きて諸經の第一と。或は俗諦・真諦・中諦等を説き

て第一なりと。一切の第一に非ず。今の無量義經の如きは四十余年の諸經に對して第一なり」(定九三・四頁)と述べ、爾前の諸經の比較の程度がまちまちであることを指摘して、『法華經』の開經としての『無量義經』の意義を高揚するのも『一乗要決』と全く同様である。

さらには『一乗要決』大文第八の中の「二、解深密經を料簡す」では「真了義教と名ずくるは、彼の經の第二卷に云く(中略)今第三時中に於て普く一切乗を發趣する者の爲に、一切法に依つて皆自性なく、生なく滅なし、本来寂靜、自性涅槃、自性々無し、顯了の相を以て正法輪を轉じ第一甚奇なり、最希有と爲す、今に于て世尊の轉ずる所の法輪は上なく容なしとはれ真の了義なり。諸の諍論安足処所に非ず、已上。何ぞ独り法華を指して真実の教と爲すや」(『正藏』七四卷三六九)と、『解深密經』の第二卷の説示に関連して『解深密經』こそが「了義經」であるとする主張に對し、最澄の著述等を引用して反論を重ねている。その中で『法華經』の信解品の「三時」は『解深密經』の「三時」と同じではないかという疑問について、源信は「広文を按ずるに云く、二十年の中に常に糞を除かしむ、是れ初時なり。是れを過ぎて已後心相体信して入出難き無し、是れ二時なり。長者自ら將に死んこと久しからずと知る等、是れ第三時なり。終らんと欲する時に臨みて而も其の子に命ず。是れ第四時なり。經文四時

顯然なり。故に天台は次の如く阿含・方等・般若・法華、漸教の四時と為す」（『正藏』七四卷三七〇c）と述べ、信解品の「長者窮子の喩」を論拠として、『解深密經』の「三時」の教判によって『法華經』を判定することは不適切であると結論づけ、さらには『涅槃經』と『解深密經』の勝劣についても課題としている。

これに対して『守護国家論』大文第一の中の「四、且く權を捨て実にくべきことを明す」では、「了義經」とはいかなる經典であるかについて論じているが、そこで華嚴・法相・三論などの諸宗がそれぞれの拠り所とする經典を「了義經」としていることを取り上げて「法相宗の如きは、阿含・般若等を卑しめ、華嚴・法華・涅槃を以て深密經に同じ同じく中道教と立つると雖も、亦法華・涅槃は一類の一乗を説くが故に不了義經なり。深密經には五性各別を存するが故に了義經と立つるなり」「法相宗の如きは三時教を立つる時、法華等を以て深密經に同ずと雖も、深密經五卷を開き見るに全く法華等を以て中道の内に入れず」（定九七頁）と述べ、法相宗の三時教判によって『法華經』を判定することを否定する。

また日蓮の『注法華經』の「卷三の見返し」の法相教学関係の經論疏の注記は、『一乗要決』大文第八「三、余經一乗を弁ず」で一乗思想に関連して『勝鬘經』と『法華經』の相

違点について論じられる部分に引用されるものほとんど同じである。さらに『注法華經』信解品にみられる『中阿含經』の注記は、『一乗要決』大文第八「二、解深密經を料簡す」で源信が「長者窮子の喩」に關説して、釈尊の説法が四十余年を経て次第に深まり『法華經』に至って真実が明らかにされたことを述べるにあたって引用する『中阿含經』と同様である（拙著『日蓮聖人教学の基礎的研究』三〇二頁参照）。

叙上のような点から、日蓮が『守護国家論』の大文第一を執筆した際には、『一乗要決』大文第八の源信の主張が重要な役割を果たしていたことが推察されるのである。

〈キーワード〉 日蓮、源信、『一乗要決』、『守護国家論』

（身延山大学助教授）